

# 先生と子どもとの人間関係 ①

自由あそびのとき、先生はどのようにするか



子どもの生活の大部分は遊びです。遊びは自発的に行なわれま  
す。子どもは自発的に行なわれる遊びの中で、あらゆる能力を思う  
存分に発揮します。そして必要なことがらをとり入れます。したが  
って先生にとっては、子ども達ができるだけ自由に、心から楽しん  
で遊べるように工夫しながら保育をすすめることがとても大切で  
す。先生のちよっとした工夫が遊びはじめるきっかけとなり、遊び  
をさらに発展させます。これは幼稚園と保育園の自由遊びの記録か  
らまとめたものです。

## ○子どもが存分に遊べるように環境をととのえる

子どもが存分に遊べるには、環境が安全であることです。あらか  
じめ危険なものとはりのぞいておきます。

## 磯部景子

### △庭で

庭に倒れた鉄棒があります。三人の子どもが鉄棒をおこそうと  
したり、のったりして遊んでいます。先生に「いけません」とい  
われて子どもはやめます。

先生に注意されてやめたものの、子ども達はせっかくおもしろく  
遊んでいたのという気持がするでしょう。「倒れた鉄棒はあぶな  
いからほかのところまで遊びましょう」といわれれば子どもは納得し  
てやめたでしょう。しかし危険なものは、あらかじめとりのぞいて  
おくことが必要です。「いけません」ということがあまり多すぎる  
と子どもは自発的に何かをしようという気持を失います。

子どもが遊べるように環境を整えることは、ものをとおして間接  
的に子どもに働きかけて、子どもが遊びやすいようにすること  
です。たとえば積み木などの遊具を遊びやすいようにしておく  
か、子どもが遊んでいる状態に応じて、机やいすを移動するなど  
です。ものをとおして子どもに働きかけることは保育の重要な機能の  
一つです。子どもが何かをするときに、それを自分で選択してやる

のと先生にいわれてやるのでは、同じ活動をするのにもその活動のもつ意味がちがってきます。先生は教材や遊具を適当に配置しておくことにより、子どもに活動の意欲を起させることが大切です。

#### △ある四才児のクラスで

子どもがジャングルジム、砂場、ぶらんこなどで遊んでいる。

先生は子どもが遊んでいるのを見ていたが、やがて部屋に入り、部屋の中にいた子どもと手をつないで砂場に行く。砂場のそばにある箱から子どもといっしょに、木の器やバケツなどを出している。向うから子どもが走って来て、

「せんせい、なぜそんなにもっているの。」

「せんせい、なにかしようよ。」

といいながら子どもは砂をほりはじめる。

これは先生が子どもといっしょに遊具を砂場に出しているのを子どもが見つけて遊びはじめた例です。

#### ○ 楽しく遊べる雰囲気

遊びは安定感があつてはじめて生れてきます。先生と子どもの間に信頼関係ができていることは、保育をすすめるのにとっても重要です。子どもが先生に話しかけてくればうなずいたり、こたえたり、一人でぼつんとしている子どもがいれば、先生は頭をなでてはなしかけたりします。子どもがしていることをほほえんで眺めたり、ま

まごあそびでせんたくをしているのを見て「あらきれいにせんたくができましたね」とほめたり、ジャングルジムにのぼっている子どもを見て「たかいこと」と見あげたり、子どもが「おもしろいものがあつたよ」と持ってきて来れば「どれどれ」と見入ったりすることとは、子どもがいつそう遊ぶ意欲をおこすのたいへん必要なことです。先生が積極的に楽しく遊べる雰囲気をつくることは、後に子どもどうしでお互いに楽しく遊べる基礎となるでしょう。

#### ○ 観察をする

子どもの遊びを観察することは保育をすすめるのにとっても重要です。子ども一人ひとりの特徴を知り、子どもを理解することができず。そして先生が子どもに何をすればよいかを知ることができず。子どもの友達関係をみることもできます。子どもの遊びを観察することにより、子どもが自発的に遊んでいるを生かしながら保育をすすめることもできます。観察することにより、遊びを発展させるきっかけをみつけることもできます。一人でぼんやりしていることが多い子どもには、さそいかけて遊びの仲間に入れるきっかけをみつけます。子どもたちが砂場でお団子をつくっていて、そこで遊びがとどまっている時に「ごめんください。おだんごをください」と先生がお客さんになって、「ごっこ遊び」へのきっかけをつくる適当な時を知ることができます。積み木をつかっただんなことをしているかしら。ままごと遊びではどんな遊具をつかっているかし

ら。道具をどのように分けていくか知ら。だれがどんな役をしているか知ら。などと子どもの遊びを観察していると保育に必要なヒントがうかんできるところでしょう。

子どもは夢中で遊んでいますが、遊びのあいまに適当に休息していることもみられます。走りっこに夢中になっていた子どもが「ぼくやめた」といって部屋に入り床にべったり座って、休息しながら友だちのしていることをじっと見入っていることがよくあります。そして、いいなと感じるといかにもいい思いつきをしたという様子で、遊びはじめた時に何らかの形でさっそくとり入れていきます。子どもの遊びをみていると、子どもが自分の持っている能力を十分に發揮して遊ぶまでにはとても時間がかかることがわかります。次の例はよく見られることですが考えてみる必要があります。

#### △久しぶりに晴れあがったある日

先生 「きょうはいいおてんきになったからそとであそびましょう。」

と子どもをきそって外に出る。子どもたちがごきごきを運んだり、ままごと道具を運んだりしてようやく遊びはじめた頃、お部屋に入りましょうといっ、先生はオルガンをひきはじめる。子どもたちは部屋に入る。

#### △ある三才児のクラスで

子どもが電話の受話器をとって

子ども 「もし、もし。もし、もし。」

と喋って話しはじめ、せっかく遊んでいるのに先生 「おせきにつきましよう」といって製作をはじめ。

#### ○ 子どもが遊びはじめて存分に遊ぶまでには、とても

長い時間がかかります

子どもの遊びはあらかじめ目標をたてたり計画があったりということは少ないようです。いったんたてた計画も、遊んでいるうちにくるくると変えられます。目標は遊んでいるうちにできてくるようです。したがって目標をつかんで存分に遊ぶまでには長い時間が必要です。

#### △五才児のある朝の遊び

ひろし 「ひろお、こないかな。」

よしお 「きたよ。」

ひろし 「うそ。」

よしお 「ぼくがきたよ。」

二人は笑いながら庭に出ていく。ひろしが向うからかけて来て

ひろし 「ちいさいこにろうやにいれられちゃうからたすけて。」

とそつとひろしに喋って、ひろしの手をひっぱるようにし

て走っていく。おさむがきて

おさむ 「いれて。」

ひろし 「ぼく『いれて』っていうんじゃなくてたのまれたんだよ。」

あきらもいつの間にかきていて、ひろしのまねをする。

あきら 「たのまれたんだ。」

おさむは一人で手をふりあげて体操をはじめ。ひろしはジャングルジムのろうやに入れておられるまゆみをすくい出し、ジャングルジムをはなれておさむの方に行く。一郎が来る。

一郎 「なにしてんの。おしえて。」

よしお 「おやまにいこうよ。」

一郎 「じゃ、いこうか。」

というが実際には行かない。

おさむが走って来て

おさむ 「おれ、じゅうどうならっているから。」

といてよしおにとびつく。まわりにいた小さい子どももじゅうどうのまねをしている。一郎は小さい子どものころに行き

一郎 「うつなら、ぼくにこい。」

といて小さい子どもがおいかけて来るのを上手にきりぬける。しかしとうとうたれて

一郎 「あつきたい。」といて逃げる。

ひろしも一郎のまねをして、小さい子どもの注意をひいてはうまくくりぬける。よしおが小さい子どもとしんげんに取り組んでいるのを見て

一郎 「あいつ、ちびだから、ほんきでするのをよしな。」

という。おさむは相変らず

おさむ 「おれ、じゅうどうならっているんだ。」

と腕をのぼしたりちめたりする。ひろしはそれをみて

ひろし 「あっほんとうだ。じゅうどうのやりかただ。じゅうどうってなげて、どすんとたおすんだよな。ふとってきて、どすんとほねまでくるんだよな。」

というや、ただしと組み合う。

ひろし 「ただしちゃんて、ちいさいけどつよいよ。」

という。次に、ひろしと一郎が組み合う。一郎がだらりと

ひろしによりかかると

ひろし 「くたびれたのか。」という

よしお 「おゆうぎ室でやるの。バスマット(マットのこと)の上で。」

というが

ひろし 「あつけないんだよな。まねだけならいいけどな。」

一郎 「おれのなかまはこい。」

ときなり走り出す。みんな走っていく。草原でバッタがとんでいるのを見て

一郎 「バツタをどうろう。」

ちあき 「おうさまバツタがとんだよ。」

一郎 「ほんでみたよ。」

みんなばうしをなげたり、両手を前に出して倒れるようになつたりしてバツタをおいかける。みんなバツタをおいかけながら走り出す。固定円木のところに来た時

一郎 「おれのなかまはこい。」といつてとび上る。

みんな 「なかまはこい。」

みんな 「入れて。」

などといいながら固定円木にとび上る。

一郎 「おおい、おおい、きめるんだよ。」

あきら 「入れて。」

一郎 「わかったよ。ひろしはこつち、おさむはこつち。」

と仲間を二組に分ける。五人ずつの組になる。両側からつめよつて、じゃんけんで負けた方がおりて、勝った方が前にすすむあそびをはじめ。じゃんけんをするとき後から「ほら、ちよきださないで。」

「ばあをだせ。」

とかいって、じゃんけんをする子どもはもちろん、後に並んでいる子どもも、いかに楽しそうに遊ぶ。じゃんけんでまけると谷底にでも落ちるようなかつこうで

「ざんねん。」

といつて、とびおりの。勝つと肩をいからして、前へすすむ。やすしがじゃんけんをしないうちの前にすすみ出ると

みんな 「いやだな。」という。

これは登園後ルール遊びがはじまるまでの子どものうごきを記したものです。朝登園すると友だちが来るのを待っている様子が見られます。そしてあとから来た子どもは仲間になって一しよに遊びたいので、友だちが何をしているかを知りたくて「なにをしているの」「入れて」といって、一しよに遊びはじめます。小さい子どもをかばうとか、先生にしてはいけないといわれていることは、先生がいなくてもまもられています。リーダーがあらわれて、ルール遊びがはじまり、ルールにはずれたずいことをすると、皆からいやがられるのがみられます。

### ○ 子どもといっしょに遊ぶ

先生が子どもといっしょに遊ぶことは、先生が子どもの生活感情を知り、子どもと親しみをもつのもっともよい機会です。子どもといっしょに遊びながら生活指導をすることができると、保育をすすめる手がかかりを見いだすことができます。先生が仲介になって友だち関係を豊かにし、けんかなどの対人関係の処理の仕方をおしえることもできます。

### △先生が中心になって遊びをはじめの例

子どもは外で遊んでいる。先生は机を並べ終り子どもと手をつないで外に出る。砂場、ぶらんこ、すべり台ではそれぞれ子どもたちが遊んでいる。先生はにこにここと眺めながら歩いていく。庭の垣根のところ、ぶらぶらしている子どもにも笑って話しかける。子どもも笑って先生の手につながって歩く。庭の中ほどまで来て、先生はちょっと走り

「おにごっこするものこのゆびとまれ。」

という。子どもたちは

「わーっ。」

といて走って先生の指にとまる。指にとまったままで先生と子どもたちははなしをしている。

「じゃんけんぽん。」

とじゃんけんをするが、五人の子どもがばらばらに出すのでわからない。子どもは先生の顔をみたり、手の方をみたりする。今度は二人ずつ組んでじゃんけんをして、おにがきまる。子どもたちは走って垣根につかまる。先生もいっしょうけんめい走って遠くの桜の木につかまる。先生が木をはなれて走り出すとおにがおっかける。先生は他の子どもの方へ走っていく。おには他の子どもをおいかけはじめる。こうして遊べるようになったとき、先生は砂場に行く。お団子をつくっている子どもの袖をまくってあげる。子どもが

「せんせい、おだんご。」

と先生に砂のおだんごをあげる。先生は

「いただきます。」

と食べるまねをする。そして

「しろすなのおさとうがおいしいわ。」

という、子どもたちはよろこんでお団子に

「おさとう、おさとう。」といて白砂をかける。

入園後まもないころや年少児においては、先生は子どもにやさしくさそいかけて、子どもがいっしょに遊べるように遊びを提供し、知らず知らずのうち他の子どもといっしょに遊べるように工夫することが大切です。この例で垣根のところ、白砂の子どもは皆と何かするときにはいつもさわいで、皆からいやがられている子どもです。先生がその子どもに特別に注意をはらっていっしょに遊んでいるのがみられます。また、お団子を食べる時、白砂のおさとうがおいしいといったことから、子どもがよろこんでいっしょうけんめい白砂のおさとうをかけはじめるのがみられます。

△子どもたちがいいあらいをしているとき

ぶらんこの下にござをしいて、ぶらんこの上にも道具をおいてままごと遊びをしている。一人の女の子がぶらんこの向う側に立ってない。ままごとをしている子どもが女の子になにかいっている。

先生「どうしたの、のりちゃん泣かないでいってごらん。」

のりこ「——」

子ども「のりちゃんいうこときかないの。」

子ども「こいじやだめといつてもこぐの。」

子どもたちはぶらんこを家にしてままごとをしていたが、のりちゃんがきてぶらんこをひっぱるのでけんかになったのである。

先生はのりちゃんに

先生「こいだの。おうちなんですって。みましようよ。」

という。先生はのりちゃんがぶらんこにのりたそうな様子をしているので、ままごとあそびをしている子どもたちに

先生「ぶらんこにのりたいひといるから、おうちをひっこし  
ましようよ。ぶらんこはのりたいひとにかしてあげましょ  
う。」

といって子どもたちとおうちのひっこしをする。

子ども「えっさ。えっさ。」

といつてもつをはこぶ。ぶらんこにのりたかったはずののりちゃんもついて来る。みんなの仲間に入りたいたいのです。

先生「のりちゃん、おままごとに入れてもらいたいの。」

のりこはこっくりとうなずく。先生はあたりをみまわして、

先生「のりちゃんがいるのじゃおうちがせまいわね。のりちゃんごきをもつてきましょう。のりちゃんもおてつだいにきてちょうだい。」

といって、のりちゃんといっしょに部屋にごきをとりに行き、家をひろくして、のりちゃんもままごと遊びに加わる。

この例では、泣いている子どもと、まわりであそんでいる子どもの両方に話しかけながら、あそびに入れなかった子どももいっしょに遊びはじめるのがみられます。

△子どもたちだけで遊んでいる時、先生がちょっと遊びに加わって

先生が外から部屋に入って来る。部屋では子どもが箱積み木で遊んでいる。大きい舟をつくり子どもが四人のっている。舟の向うには家のようなものができている。舟のまわりでアイスクリームを売っている。舟ののっている子どもが買う。家をつくっている子どもが

子ども「せんせい、はいつてよ。」

と家の中に入ってもらいたがる。

子ども「せんせいみてよ。」

先生はつみ木のかこいの家の中に入る。

子ども「せんせい、はいれないでしよう。」

子ども「はいれるでしよう。」

と得意になっているが、人がはいるには小さくてあぶない。

先生「ほんとだ。ほんとだ。」

といいながら入る。そして出て来て、

先生 「ああ、こわかったわ。おともだちがはいつてつぶれたらたいへんね。」といつてみている。

子ども 「ほんとうだ。」

先生 「おちるとあぶないわ。」

子ども 「じゃ、もっととおおきいのつくろう。」

先生はわらつてみている。

子ども 「せんせい、おかたづけまでつくつていい？」

先生 「ええ、いいですよ。おかたづけになるまで、いっしょう

けんめいつくつてね。」

子ども 「せんせい。これ。」

といつて大きい積み木をかついでいるのをみてもらう。先生は笑つてみている。

先生 「つくつたらみせてね。」とまた外に出ていく。

子どもたちだけで遊べるようになってからも遊びが停滞してはいないか、さらに発展させるにはどうすればよいかなどをかんがえることは大切です。この例では、小さな家をつくっていたが、先生が入つてみてこわかったことから、子どもたちが、もっと大きい家をつくりはじめているのがみられます。

### ○ 遊びが停滞しているとき

子どもたちが、砂場、ぶらんこなど、それぞれの場所で遊んでい

るが、何か活気がなくて同じことをくり返していることがあります。その原因の一つとして、遊び場面に、先生がいることが少なかつたり、「あぶないですよ」「ボタンがはずれていますよ」「雨ですよ。おはいりなさい」などと先生は番人のように子どもを見まもつていることが多いとか、遊ぶ時間が短いなどが考えられます。たとえば、すべり台で、ただすべることが、くりかえされている時には、少し考えてみる必要があります。すべり台で、子どもたちがよろこんで遊んでいる時の一例をあげますと次のことがみられます。手をあげたり、足をふちにかかけたりしてすべるなど、すべり方をいろいろと工夫している。

下にいる人に手をふったりしながらすべる。

友だちといっしょに、肩に手をやってつながつてすべったり、こんどはこうしようと話し合つて、すべるたびに何かかわつたことをする。

汽車のようにつながつて、だれかの合図のもとにすべる。

ままごと遊びをしていて散歩に出かけた時にすべるなど、他のあそびの一部としてすべり台を利用する。

幼稚園や保育園で子どもが自分の能力を十分に發揮して遊べるためには、先生が子どもといっしょに遊ぶことと、思いきり遊べる時間が必要です。  
(お茶の水女子大学児童学科研究室)